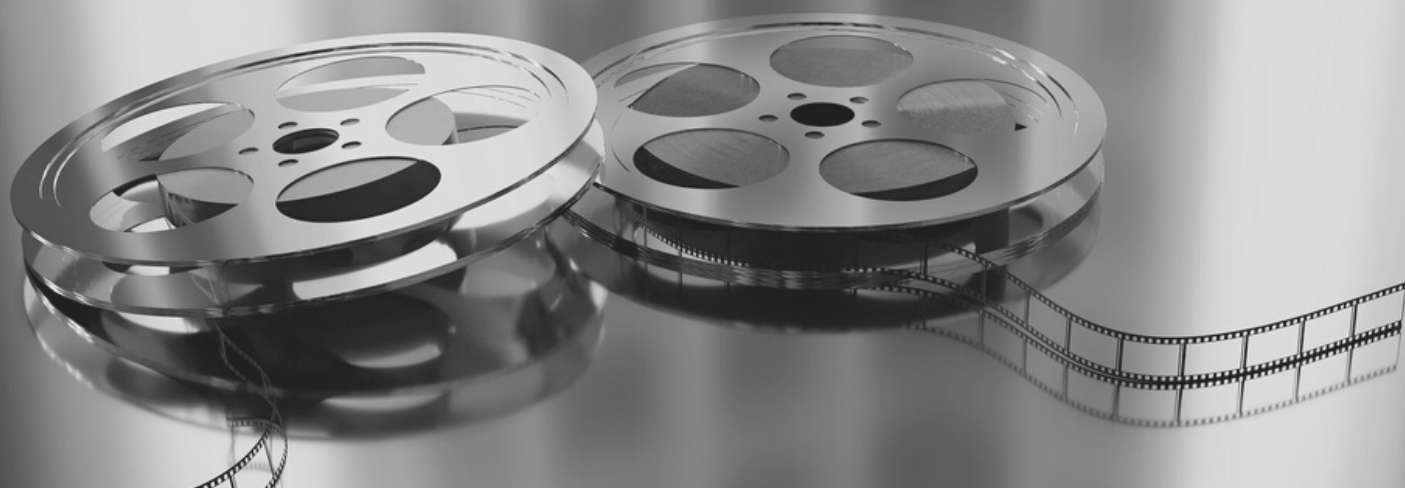


JAUW<映画クラブ>会報

シネマ通信

第9号 (2023年7月22日)



裸足になって

第9回鑑賞作品

監督・脚本：ムニア・メドゥール

制作総指揮：トロイ・コツァー

「コーダあいのうた」でアカデミー助演男優賞

出演：リナ・クードリ、ラシダ・ブラクニ、ナディア・カン

内戦の傷跡が残る
アルジェリアで
夢と声を奪われた少女が
踊ることで再び輝く

北アフリカのイスラム国家、アルジェリア。内戦後の不安定な社会の中で、バレエダンサーになることを夢見るフリーアは、貧しくも充実した日々を送っていた。

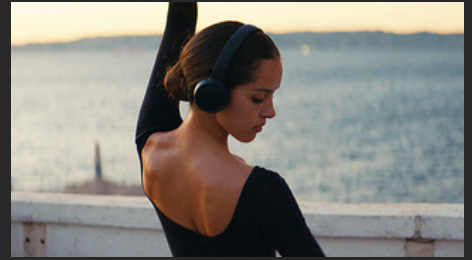
しかしある夜、暴漢に襲われて大けがを負い、踊ることも声を出すこともできなくなってしまった。すべてを失い抜け殻同然のフリーアだったが、リハビリ施設で出逢ったのは、心に傷を抱えながらも前向きに生きようとする、ろう者の女性たちだった。そして始まる、フリーアのダンス教室・・・

美しいアルジェリアの大自然を背景に、踊ることで命のきらめきを取り戻す、抑圧された少女たちの再生物語。



About Them

「裸足になって」でフリーアを演じるリナ・クードリは、「パピチャ未来へのランウェイ」「オートクチュール」などの話題作で日本でもファンの多い、注目の若手女優です。幼い頃、両親と共に内戦下のアルジェリアからフランスに移住。2014年に女優デビュー。2019年の「パピチャ未来へのランウェイ」でセザール賞有望若手女優賞を受賞し、一躍脚光を浴びます。幼さの残る愛らしい顔立ちで、心に傷を負ったり、反抗的だったり、あるいは意志の強い女性像を見事に演じ分けるところが魅力。現在30歳。これから、どんな大人の女性を私たちにを見せてくれるか楽しみです。監督のムニア・メドゥールはアルジェリア育ち。大学時代の体験を基にした初の長編「パピチャ未来へのランウェイ」で、セザール賞新人監督賞を受賞した俊英です。内戦時、本人の意思に反し家族のために捨てた祖国。自分の根っこはそこに在ると語るように、本作でも、故郷への熱い想いが全編を貫いています。世代の異なる、二人のアルジェリア系女性が、いま、フランス映画に新風を吹き込んでいます。



About Something

見たいと思っていた映画に、姉からの誘い。さっそく姉妹で「キャロル・オブ・ザ・ベル」を観てきました。この作品の舞台はウクライナ西端の街（現在のイヴァーノ・フランクウシク市）。第二次大戦前後の動乱に翻弄されるポーランド人、ウクライナ人、ユダヤ人の3家族の物語です。

プロローグは、ポーランド支配下の街角。ユダヤ人家族の所有する家に、賃借人としてポーランド人、ユダヤ人の家族が引っ越してくる。ポーランド人の母親ソフィアは、ピアノと歌の教師。子どもたちへのレッスンを通じ、また、共にクリスマスを祝うなどするうちに、最初は反発もあった住人たちは隣人愛で包まれていく。しかし1939年、ソ連が侵攻。ポーランド人夫婦は娘をソフィアに託して逃亡。続いて、ナチがウクライナ全土を占領。ユダヤ人は収容されることになり、夫婦は密かに娘をソフィアの下に。こうしてナチ支配下で、ウクライナ人夫婦は国籍の異なる子どもたちを育てることになる……。

本作のテーマ曲は、映画のタイトルにもなっている「キャロル・オブ・ザ・ベル」。映画「ホームアローン」で歌われ世界的に有名になりましたが、元は正月を祝うウクライナの民謡。この歌を歌うと幸せが訪れると信じる子どもたちの歌声が折々に流れ、暗くなりがちな物語に希望の光をともします。この映画が発表されたのが、ロシアによる侵攻直前の2021年というから驚き。オレシヤ・モルグネツ＝イサイェンコ監督は、今でもミサイル攻撃の恐れがある、キーウ在住。日本からのインタビューで「ウクライナの人々の中に戦争や悲劇的な出来事を経験せずに生き延びている人は居ません」と語っています。戦争体験者が減っていくことが問題視されている日本は、何てラッキーな国なのでしょう。平和という国家最大の幸せを、どうしたら世界中で享受できるのか？子どもの頃からの問いに、未だに答えは出せません。